



木下恵介記念館 No.7 '12 初夏号

栄町だより

Keisuke Kinoshita Memorial Museum

公益財団法人 浜松市文化振興財団
発行：木下恵介記念館
〒432-8025 浜松市中区栄町3番地の1
TEL&FAX 053-457-3450
E-mail : kinoshitakan@hcf.or.jp
http://www.hcf.or.jp
※ 無断複写・転載、放送、ネット流用を禁じます。



木下恵介
生誕100年

バックナンバーは
ホームページで。

木下恵介〈再〉発見

「人生は、色々あるから美しい」からの出発！

齊藤 卓 木下恵介記念館館長

弔辞にはおられる者とおくる者の美しい関係が語られる場合がある。

「何かもどかしさがあります。日本の社会はある時期から、木下作品を自然に受けとめることができにくい世界に入ってしまったのではないのでしょうか。しかし、人間の弱さ、その弱さがもつ美しさ、運命や宿命への畏怖、社会の理不尽に対する怒り、そうしたものにいつまでも日本人が無関心でいられるはずがありません。

ある時、木下作品の一作一作がみるみる燦然と輝きはじめ、今まで目を向けなかったことをいぶかしむような時代がきつとまた来ると思っています。それをこの世で木下さんに見ていただくことはできなくなりましたがそんなに先のことはありません。淋しがらずに待っていて下さいと申し上げたい気持ちです。」

これは木下恵介監督の葬儀で山田太一さんが述べられた弔辞である。僕のような者がこの言葉を引用することは、両者の関係に無遠慮に割り込み、訳知り顔の元をつくってしまうような気がするのだが、引用をお赦しいただきたい。

ただ弔辞で語られた、その「ある時」がむしろに始まりだしているような気がするのである。

ひとつの「ある時」は、今年の第65回カンヌ映画祭クラシック部門でデジタルリマスターされた『榎山節考』1958(年)が世界の名作に並んで初上映された事である。

映画史家のウルリッヒ・グレゴール氏は「(木下恵介は)黒澤明、小津安二郎、溝口健二らと並ぶ、日本を代表する監督。世界の映画史の中での再評価につながると」解説した。(毎日新聞「カンヌ映画祭中間報告」より)

木下恵介という「巨大な器」を限られた言葉の引用で表現することは不可能であると思う。そしてそれは大変危険なことでもある。ましてやこれまで慣用表現で使われてきた数語単位の形容句ではとても言い表せるものではないと僕は考えている。

耳慣れた木下恵介に付けられた比喩の数々は、木下恵介を「使い捨ての小さなプラスチック容器」に例えるようなものでしかなかったのではないかと思えてくる。

木下恵介生誕100年のキャッチフレーズに「人生は、色々あるから美しい」という言葉が採用された。松竹の若い広報担当者たちがひねり出した。そのプロジェクトチーム

チームは木下恵介を伝説でしか知らない若い世代が中心になっていた。僕は初めてこのキャッチフレーズを目にした時、「人生は、色々あるから美しい」と呟いてみた。とても色気のある響きを感じた。人生はひとつとして同じものはない。



木下恵介は49本の映画作品と13本のテレビシリーズを僕たちに残した。しかし監督が描いた人生はそうした数字だけに押し込めることはできない。監督は画面に登場するすべての人物たちの人生を描いていたのではなかったのだろうか。いや、観客として映画を見る人々の人生さえ描いていたのかもしれない。だから人々は涙し、笑い、憤りを感じていたのではないだろうか。

これまでも木下恵介をめぐる鋭い論評は数多く書かれてきた。しかし、世の中に流布される木下恵介像は「いつも優しい校長先生のような人物」であった。(校長先生がどうして優しいのか僕には理解できないが)まるで笠智衆が演じる好々爺然とした役柄が、木下恵介その人のように人々は勝手に思い込んできた。

論者たちはそれを変えたいが為に正鵠を得た評論を発表してきた。

西村雄一郎氏は「木下恵介は、日本映画の黄金時代というべき1950年代にあって、一作ごとにそのスタイルを変えて、時代をリードしてきた監督であった。女性を描くのがピカーと言われたこの監督が、残酷で非情な現実を描くのに、いかなる技法を使ったかを、検証していこう。」「『巨匠たちの映画術』と端的に木下恵介分析を切り出し、映像論に着手している。

にも拘わらず風評は、いつも笑顔で誰にでも優しい木下恵介像を作っていた。あえて言えばそうした平凡な木下恵介像を作っていた何らかの力が働いていたのではないかと疑わざるをえない。

僕は、木下恵介記念館に来館いただいた方々とお話しをする。どの作品を観られましたかとお聞きする。9割以上の方が『二十四の瞳』『喜びも悲しみも幾年月』と答